

梅津新聞

(近世編⑦)

2021年
1月29日 金曜日常陸太田市郷土資料館
(西二町 2186)
TEL:0294-72-3201

にほんじゅう ま こ だいこんらん
日本中を巻き込む大混乱

ばくまつ
幕末の水戸藩②

たか ばくふ ふまん
高まる幕府への不満

安政3年(1856)7月、アメリカのハリスが日本と通商条約※1を結ぶための交渉を始めた頃、幕府内で13代将軍家定の後継者問題がおりりました。後継者の候補は2人。家定の従兄弟で、徳川御三家のひとつ紀伊藩主の「慶福」と、斉昭の7男で徳川御三卿※2のひとつ一橋徳川家の養子になった当主「慶喜」です。この時、慶福を応援するグループの中心にいたのが井伊直弼、慶喜を応援するグループの中心にいたのが斉昭でした。しかし翌年4月、井伊は太老※3になったのをきっかけに慶福を14代将軍とし(家茂と改名)、ここに井伊と斉昭の対立が深まっています。

太老になった井伊はさらに、反対派を抑え、朝廷の許可を得ないままアメリカと日米修好通商条約を結びました。この条約は、日本が不利になる不平等な内容のもので、勝手に条約を結んだことに対し斉昭は、10代藩主慶篤などを連れ、井伊の責任を問うため江戸城に向かいます。いわゆる「不時登城」です。しかしこれは退けられ、再び謹慎処分を受けることになりました。このことで井伊と斉昭の対立はさらに深まり、また、幕府と朝廷との関係も悪化していくのでした。

※1 通商条約…国同士の経済交流のための約束事。

※2 徳川御三卿…徳川氏の一族のうち、田安家、一橋家、清水家の3家のこ

と。8代将軍吉宗が始めたもので、御三家と同じく、将軍が途絶えた時には跡継ぎを出すことになっています。

※3 太老…幕府において、将軍の次に位が高い役職が「老中」ですが、臨時的に老中より位が高い「太老」という職が置かれることがあります。



がまん げんかい
もう我慢の限界!!
さくらだもんがい
「桜田門外の変」

安政4年8月8日、井伊から処分を受けた水戸藩に、幕府を通さずに朝廷から勅諭(天皇からの言葉)が下されま

このとき、常陸太田では… 井伊が太老になり、斉昭の幕府内での発言力が弱まってきた頃、斉昭は道半ばでストップしていた水戸藩の天保改革の続きに乗り出しました。この時の改革は「戦いへの備えを充実させること」と「教育の振興」が主な目的でした。市内にあった益習館(後の太田郷校)・町田郷校・小菅郷校では武術教育が始まり、文武両道の教育が行われるようになっていきました。



した。この出来事は「戊午の密勅」といわれ、幕府が朝廷の許可なしに条約を結んだことを批判し、斉昭らを処罰したことを注意するような内容でした。幕府はこの勅諭を返すよう水戸藩に命令しましたが、これが水戸藩の改革派をさらに分裂させることとなります。勅諭返納に反対して尊王攘夷を進める者たちを「激派」、幕府の命令を尊重し勅諭返納に賛成する者たちを「鎮派」と呼び、さらに鎮派は門閥派と結びつきを深めました。



安政4年から翌5年にかけて、井伊は反対派の大名や尊王攘夷派の公家を厳

しく取り締まりまし
た(いわゆる「安政の
大獄」)。そこに加え
て水戸藩へ勅諭を返
すよう求めたこと
で、井伊に対する
反発は高まり、尊王
攘夷活動は激しくな
っていくのでした。



安政の大獄にひどく怒りを抱いた水戸藩士たちは、井伊の暗殺を計画します。そして万延元年(1860)3月3日雪の日(この日は大名たちが江戸城に集まる日でした)、井伊家の行列が江戸城の桜田門を通る時、隠れていた水戸浪士※4たちが一斉におそいかかり、籠の中にいた井伊を刀で突きさしました。これに参加したのは18名、水戸浪士 関鉄之介ら17名と薩摩藩士※51名です。

※4 浪士...主人の元を離れた武士、または仕える主人の無い武士。桜田門外の変を実行した水戸浪士たちは、前日までに藩を抜けていました。



※5 薩摩藩...鹿児島県の大部分と宮崎県の一部を支配した藩。長州藩(山口県)の大部分を支配していた)とともに倒幕運動の中心となって動きました。

役者、そろいぶみ!

ここで一度、水戸藩内の派閥がどう変わっていったのか整理してみよう。

まず天保年間(斉昭が藩主の頃)、改革を進めるかどうかで「改革派(天狗)」と「門閥派」の2つの派閥が生まれました。その後改革派は安政年間(日本が開国した

後)に尊王攘夷派となり、戊午の密勅をきっかけに「激派」と「鎮派」に分かれました。激派は後に「天狗党」として水戸藩を大きく混乱させました。

さて天狗党の一部、藤田小四郎を中心とするグループは、斉昭が亡くなった4年後の元治元年(1864)3月27日、斉昭の遺志※6を継ぐべく筑波山に集まりました。メンバーは最終的に1000人を越えたと言われており、当地方からも50数名が参加したようです。しかし尊王攘夷という同じ目的の元に立ち

あがったものの、その考え方の違いから、グループがさらに分裂します。「朝廷から幕府に攘夷を促してもらおう」とする藤田小四郎を中心とするグループ(本隊)、「外国勢力に立ち向かうため、幕府を倒して朝廷が中心の政治に戻そう」とする田中愿蔵を中心とするグループです。

対して、天狗党を打ち取るため弘道館の学生が「諸生党」を結成します。ここには鎮派と門閥派が含まれていました。さらに、これらの騒動を収めるため、幕府が追討軍を派遣します。同じく水戸

このとき、常陸太田では... 天狗党が筑波山に挙兵した

後の6月、田中愿蔵を中心とするグループは天狗党本隊から離れ、北へ向かいました。その道中、軍資金や食べ物を取りやうば無理矢理奪いとったり、放火したりなどを繰り返していたと言います。7月には常陸太田市内にも出沒し、金品強奪を繰り返していたようです。乱暴な田中隊の行動は、当地方の人々の多くが諸生党に味方するきっかけとなりました。その例のひとつが、石川部平です。田中隊は地方の知識人や有力者を仲間にしようと、益習館などで学んだことのある石川部平の家に押入りました。この時石川は身の危険を感じ、別の場所へ避難していたため無事でしたが、後に石川は諸生党に入る決心をします。そして仲間とともに農兵を募集すると、天狗党に不満を持つ農民が彼らの元に集まったのでした。

藩からも、支藩※7である宍戸藩主(笠間市)松平頼徳が派遣されました。(日本中を巻き込む大混乱 幕末の水戸藩③に続く)

※6 遺志...亡くなった人が果たすことができずに残したところざし。

※7 支藩...本家から分かれた人が藩主になった藩。

